

■ PLANET—学生による地域づくりネットワークシンポジウム— ■■■■■■■■■■■■

日 時：平成 23 年 2 月 20 日 (日) 開場 10 : 00

場 所：高松市／丸亀町レッツホール・ドーム広場

参加大学：愛媛大学、香川大学、香川短期大学、香川高専、高知大学、徳島大学、富山大学、同志社大学、立命館大学ほか (12 大学・高専にまたがる)

<プログラム>

1 部 まちづくりの先進例から学ぶ 10 : 20～

2 部 まち自慢県民ショー on 街頭ステージ 13 : 00～

3 部 学生によるまちづくり円卓会議 15 : 00～

主 催：香川大学「学生地域づくりネットワーク」

共 催：香川大学工学部・経済学部、(社) 日本都市計画学会中国四国支部、KNS 四国支部

参加者：140 名

“PLANET”とはPlace-making Networkすなわち地域・まちづくりのネットワークを意味する。本シンポジウムは、学生が地域・まちの活性化を自らの問題として考え、学生の目線で活性化方策を考えることを狙って、学生相互の学び合いの場、切磋琢磨の場として設けられたものである。「よそ者・若者・バカ者」という言葉が地域づくりの原動力として引き合いに出される。しかし、平均値で見る限り、いまどきの学生にそのような役割は望めない(?)。市民の声を聞いても、学生への期待は薄く、価値ある存在とは認められていないのが実情である。「殻を破り、社会の認識を変えたい。」そのような思いをもつ学生達が、四国・中国・関西から集まった。

午前から夕方までの8時間に及ぶ体力・知力・情力(やる気)の全てを動員した密度の高いイベントであった。学生達の活躍の姿は、Ustreamやtwitterを通じて広く発信された。

第一部は、香川大学の大平文和工学部長の開会挨拶で始まり、高松市丸亀町振興組合理事長の古川康造氏、富山大学人文学部の大西宏治准教授、富山市役所の佐伯哲弥氏および高松市長の大西秀人氏から以下のテーマで講演がなされ、まちづくりの先進事例が紹介された。

- ・丸亀町古川理事長「なにがでつきよんな、丸亀町」
- ・富山大学大西准教授・富山市佐伯氏(富山LRTの仕掛け人)
「コンパクトなまちづくりでまちは変わるのか?」
- ・高松市大西市長「高松の新しいまちづくり」

また、これら講師陣と学生らとの間で、今後のまちづくりに関する自由討議が交わされた(写真1)。普段の授業態度とはうって違って、講師陣に矢継ぎ早に質問を投げかける学生の頼もしい姿が見られた。

第二部では、舞台を屋外のドーム広場へと移し、買い物客の往来の中で「まち自慢県民ショー」が行われた。参加大学・高専の中から実際に地域・まちづくりに関わっている10グループが登場し、「食」、「祭」、「交通」、「まちなかキャンパス」などをテーマに自分達の取り組みを報告し、プレゼンを競い合った。多くの来街者の方々が足を止めて、学生達の「県民ショー」に聞き入っていた(写真2, 3)。

第三部では、再び屋内ホールに戻り、富山大生のボランティア(まちなかメイクアップ)の取り組みと広島・関西の大学生によるまちなかビジネス(カフェ経営等)の取り組みを基調報告として、学生目線での地域・まちづくりへの関わり方が議論された(写真4)。1) 社会貢献として関わるべきか、起業を視野にいれて取り組むべきか、2) 自己満足で終わらないためにノウハウやスキルをどのように身につけるのか、などが主な論点であった。ボランティアを主張する学生達とビジネスを主張する学生達の間で、志の高さに差があるわけではない。両者に共通するのは、社会からリスペクトされたいという願いであることに気付かされた。

PLANETを主導した学生達は、現在、東日本大震災の支援ボランティア隊としても活躍している。また、本年度は早稲田大学等と連携し、PLANETの輪を東日本にまで拡大させようと企画構想中である。大学と地域社会との関係は大きく様変わりした。地域社会の支えなしに大学は存続しえない。地域社会からリスペクトされたいという学生の想いも切実である。



写真1 大西市長・古川理事長と学生との意見交換の風景(第一部)



写真4 学生によるラウンドテーブル討議の風景(第三部)



写真2 ドーム広場でのまち自慢県民ショー(第二部)



写真3 愛媛大生による伊予鉄自慢のプレゼンテーション(香川大生のことでん自慢に対抗して)

(文責：土井健司)